

「それでは、新郎新婦のご入場です！ 皆さま、拍手でお出迎えください！」

アナウンスと同時にポップなBGMが流れた。

俺はこの曲を知っている。彼女がパスタを茹でながら、時折口ずさんでいる歌だ。スポットライトに照らされながら、新郎新婦が歩き出した。

にこやかに手を振る花嫁の隣でロボットのよう動いているのは、本番に弱い俺の部下。ああ、プレゼン時と同様に手足が同時に出てしまっている。

一通りの挨拶が終わると、流線形のシャンパングラスが同時に上がり、乾杯となった。

歓談と食器の音の中、俺はウェイトレスを呼び止めて、こっそりと耳打ちをする。

「ジンジャーエールを、ワイングラスで」

同卓の同僚と話しながら、目線は別卓の恋人へと移る。

藤の花のコサージュと一部を編み込んで波打つ髪が、彼女の胸元を飾っている。スワロフスキーの髪飾りが身じろぎする度にきらきらと、小さな星を生んでいた。

嘆息し、フォークを取る。

俺の彼女は、可愛い。

一挙手一投足全てが可愛い。

可愛いのが権化が過ぎるため、できればケージに閉じ込めて一日中眺めていたい。

『そんなこと言うのは、課長だけです！ 現に、モテたことなんてないし』

可愛い可愛いと伝える度に、彼女はそう返すのだが、

——君は、自身の魅力について一度分析をする必要がある！

——冷静、かつ客観的な経過観察の後、不慮のアクシデントに備えて対応策を取れ！

と、肩を掴んで揺すりながら、こう訴えたいのが本音である。
現にほら、別卓の男が酒瓶を持って話しかけようと近付いてくる。

（……くそッ）

内心悪態をつきながらも、顔には出さずテリリーヌをつつく。

あいつは以前、彼女との企画を俺に相談してきた男だ。見た目もいい、能力もある。慎重に事を運び、勝率を確かなものにしてから仕留めにいくタイプ。

（……大丈夫、信じている。信じているから）

まじないのように唱えてから、俺は目を閉じ、嘆息した。

彼女と俺が付き合っているのは、二人だけの秘密にしている。

本当は生きとし生ける全てのものにプロジェクトとパワーポイントで二人の仲を解説したいが、上司と部下という関係上、鼻屑をすると思われては彼女のためにならないため、今のところは我慢をしている。——そう、今のところは。

そもそも彼女の仕事ぶりに俺が感心していたのは、恋に落ちるより遙かに前で、本当に、ずっと前から評価をしてきたというのに、それを証明できないのが歯がゆい。

——ああ、俺以外の男にまで、そんな笑顔を見せるんじゃない。さらわれでもしたらどうするんだ。

舌打ちをしたい衝動を堪えて、ワイングラスを一気にあおる。

さすがは有名ホテルのジンジャーエールだ。甘みのない、苦み走った味で……もう少しだけ、甘くて優しい味だとよかったんだが。すっかり炭酸も抜けている。

「ぷ、はぁ……ッ」

グラスをテーブルに置くと、俺は両手で顔を覆い、肘をついた。

畜生、という呟きが、知らずのうちに口から漏れる。
自分がこんなにも余裕が無い男だとは、彼女に恋をするまで、思ってもみなかった。

……見たく、ない。

彼女が、他の男と親しげに笑う姿を見たくない。

今すぐ白い首と鎖骨に唇をつけて、おれのものだというしるしを――

「はは」

――なあんだ。

簡単なことじゃないか。

誰にも見られたくないのなら、今すぐ、おれがさらえばいい。

のろのろと顔を上げ、運ばれてきたステーキを見据える。切り口から、赤く潤んだ柔らかな肉が覗いている。

「あーっ、近衛が俺の白ワイン、勝手に飲んだー！」

同期が隣で何か言ってきているが、知らん。
おれが飲んだのは、あまくない、ジンジャーエールだ。

「もう、しらん」

吐き捨てると、ばさりとナプキンを掴んで捨て、おれは音を立てて立ち上がった。

二人分の荒い吐息が、ホテルのスイート・ルームに充満している。食べ損ねたステーキ肉の代わりに、おれは赤く潤んだ肉を、こうして丹念に嘗め回している。

いやあ、だの、やめてえ、だのと、形ばかりに咎める声が何度も頭上に振ってはくが、ガーターベルトの太腿はぐいぐいと俺の頭を締め付けてくる。

「どんな肉よりも、うまい……」

顔を上げて教えてやれば、相手は耳の縁まで真っ赤になった。

やはり、彼女が世界で一番可愛いのは間違いない。

おれはもう一度頭を沈めて、誘う匂いが充満する茂みに鼻先を埋めた。

舌先を熱く潤んだ中まで伸ばし、ぐりぐり、ざりざりと擦りつけるようにして蕩け

る奥まで愛撫を続ける。嬌声と共にぐねぐねと舌に合わせて彼女は動き、やがて高い悲鳴と同時に、がくがくと揺れて力が抜けた。

「……なあ」

おれは恋人にまたがると、限界まで立ち上がったモノを突き上げるようにして見せつけた。

「このまま、奥までぶち込みたい」

劣情を柔らかな腹に数度擦り、ついばむようなキスをして誘う。

熱心に見つめれば、熱に浮かされたように火照った顔が、おれをとろん、と見上げていた。

「どうする……?」

もじもじと太腿を擦り合わせてからの恥ずかしそうな『おねだり』に、おれは喉奥

で笑いながら、いきり立つ先端をあてがった。

ぷちゅり、と浅めに挿れてから、まずはゆるゆると腰を動かす。

時折カリで引っ掻いたり、ぐりいっ、と軽く押しついたり。

あ、ああ、とその度に切なそうに彼女は呻き、やがて腰を浮かせながら自ら奥へと進めてきた。

「……おれのちんぽ、丸呑みしたい？ そんなに早く欲しいんだ？」

からかえば、泣きながら頷いて、両手をこちらに伸ばしてきた。

「ッハ、……お望み、通り……ッ！」

固く抱き締めてから唇を重ね、思いつきり腰を打ち付ける。裏返るような喘ぎ声が、絡まる舌の奥底より沸く。

パンッ！ パンッ！ 激しく肌のぶつかる音が広い部屋に響き渡った。

彼女はいつも以上に大声で喘ぎ、淫らに動き、キスを求めて、破れたストッキングの爪先を俺の腰へと絡めてくる。

ぐちゅんっ！　ぶぴいっ！　ぷちゅうっ！　動く度に、淫猥な水音が次々と溢れては掻き消されていく。

頭がぐらぐらと煮え滾る。

熱い。蕩ける。愛している。愛しているんだ。

「んむう……っ、ちゅうっ、はあっ、はあ……っ、なあっ、このまま、朝までずうっ
と……おれと子作り、してよっか？」

糸を引きながら唇を離し、茹だった頭で提案すれば、返事の代わりにぐしゃぐしゃの笑顔が返ってきた。

ねろり、と再び舌が絡む。音を立てて吸い合いながら、ガーターベルトの隙間に指を滑らせて太腿を掴む。

ぐうっと高く腰を上げさせ、ひっくり返ったカエルのようにしてから、思い切り楔を打ち付ければ、悲鳴のような嬌声があがった。

——かわいいよ。

えっちなだね——。

——きれいだ。

やらしいなあ——。

——すぎ。

あいしている——。

徐々に高まる衝動の中、彼女の耳に想いを伝える。
息も絶え絶えな唇から出る、甘い甘いレスポンスに、痺れるような幸福と共におれは腰を振り続け——、やがて彼女と共に果てた。

……ぎゅるるる。

自身の腹の音で目が覚める。空腹感で目覚めるのは久しぶりだ。

のろのろと体を起こしかけて、腰の違和感に思わず呻く。……なんつだ、これ。起き上がる事をいったん諦め、俺はぼうつとした頭でゆっくり辺りを見回した。ホテルの部屋。しかも広い。奥にはリビングも見えている。スイート・ルームだ。

ホテル……ああ、そうだ、ホテルで部下の結婚式に出席したんだった。

それから……。

それ、か、ら……？

がばつ、と身体を起こして、再び呻く。腰の倦怠感が凄い。頭もずきずきと痛んでいる。

隣を見下ろせば予想通りに、恋人が裸で眠っていた。

「あ……………」

額を押さえて溜め息をつく。酔って醜態を晒した後でも、わりかし記憶は残る方だ。

……やって、しまった。

（そうか。あの時飲んだのは、酒だったか）

飲んだ直後の出来事をおそろおそろ思い出す。

彼女に話しかけていた部下の腕を強く掴み、『おれのものだから』と言って、皆の前でデープキスをした、気がする……。

次は自分達だと結婚宣言して、花嫁からブーケをもらった、気がする……。

そのまま彼女の手を引いて会場を後にし、フロントでホテルの部屋を取って飛び込んで……。

「……ッ、ぐわっ」

アヒルみたいな声が出てしまった。

いや、やらかしてしまったことは仕方がない。謝罪は迅速に行うのが基本だ。関係者にはこの後すぐに謝罪をして回らねばならない。ついでに下戸な事も白状をしておこう。

……だが。

ぎぎ、と首を軋ませて、隣を見下ろす。

彼女は一体、どう感じた？

恥ずかしかったんじゃないのか？

辛かったんじゃないのか？

何より、休憩も入れずシャワーも浴びずに、本当にひたすらやっていたため、身体への負担はどれだけ――。

そろそろと手を伸ばし、恋人のべたつく髪をそとかき分けて顔を出す。

ああ、涙と、涎と、鼻水の跡も、世界一可愛い、俺の恋人。

この先、会社に居辛くないだろうか。

俺を恨んだり、怒ったりしていいだろうか。

もしも、呆れられ、別れを切り出されでもしたら……。

ひゅっ、と小さく喉が鳴った。恐ろしい想像をかき消そうと、ぶんぶんと首を横に振り、頭痛ダメージにまた呻く。

「……はは」

彼女のこととなると、俺はとことんポンコツになるな。

脱ぎ散らかされたドレスを掴み、襟元のコサージュを手の中に収める。

藤の花を模したそれは、俺が彼女にプレゼントしたものだ。
花言葉の意味なんて、これまで生きてきた人生で、一度も考えたことなかったの
に。

ん……、と小さな声がして、彼女の瞼がぴくりと動く。

持ち上がりだした瞼に、俺は優しくキスをする。

おはよう、と囁けば、彼女は寝ぼけまなこの顔で、宇宙一可愛い笑顔を見せた。